

2021 July

7
月号

春燈



成瀬櫻桃子の句

汝が睫毛霧にはあらず濡れぬしよ

『素心』以後昭和五十三年

「汝が」とは誰のことなのだろうか。奥さまのことか、それとも施設に入らねばならぬ愛娘のことだろうか。それをただ見守るしかない夫として父親としての眼指はただく共に泣きたいだろうに。涙をためた瞳だということをしつかり見ているよと、抱きとめることしか出来ない、表に出せない男としての包容力と哀感が裏にある。

和田 絢子

成瀬櫻桃子の句

川風や佃の路地の涼み台

『素心』以後平成十三年

「俳句朝日」に掲載された「佃島」七句の内の一つ。佃島は下町風の家並を保ち、私自身子供の頃によく通った住吉神社を始めとして、銭湯、駄菓子屋、佃煮屋、路地の井戸など昔の面影を残している。この句は夏の夕暮路地に置かれた涼み台で談笑している人達を彷彿とさせる。隅田川からの風が肌に心地良い。別な一句に「佃小橋江戸の水母を遊ばせし」がある。

荒井ハルエ

安立公彦



雨を呼ぶ暮春の空や彩かさね

春惜しむわが身に兆す老い疎み

老鶯の昼を鳴きゐる校舎裏

万太郎忌末輩の身を正し来し

去りゆける月日たふとし敦の忌

燈下集

○ 西川保子

籠は持たず土筆野の空仰ぎをり
身の軽くなりゆく落花浴びながら
ほどほどの風をまとへり遅桜
無伴奏女声合唱復活祭
鈍りたる爪切鉄放哉忌

○ 佐藤信子

なつかしき句碑の師の文字風光る(祐天寺)
うす雲の流れて満ちて仏生会
子供らの声に囲まれ甘茶仏
揚ひばり空の青さに溺れけり
菜園の隅に育ちて葱坊主

○ 園部路郷

須弥山の見えたら雲雀降りて来よ(義経塚美千代塚)
囀は迦陵頻伽や畑仕事
覚えなき泪なりけり春の夢
何時見ても鳥海晴や花林檎
雉子鳴く夕べは淋し畑仕事

○ 片桐てい女

瀬戸春や印は撫養の齋田塩
花菜漬駅を問はずの昔塩
瀬戸内のフェイスタオルは前に積み
雷雲を押す雲出でてグウタツチ
地球語の障りは瞬時宙の夏



○ 松橋利雄

水温む過疎村一寺守りけり
大風の止みし夜空や啄木忌
本降りとなりたる雀隠れかな
鍋の湯の沸く間の春を惜しみけり
雨音の八十八夜更けにけり

○ 橘正義

春暁のラジオのバツハ聴き入りぬ
散る桜頭にのせて戻りけり
まるで緑の花咲くごとく芽吹きけり
くれなゐの若葉の樹の名未だ知らず
日々感謝鮎子釘煮頂きて（明石産）

○ 三上程子

番号で呼ばれて動く日永かな
花冷えの枕たたきて均しけり
ゆく春のちあきなおみのビギンかな
この歳で知ること多し余花の雨
たけのこの大きなかほをして来り

○ 中野あぐり

春疾風トランペットと少年と
祖師ヶ谷の桐の花見しむかしかな
菖蒲湯に日の高々とありにけり
兄よりもいもうと強気山桜桃
梅雨の灯を低く梁塵秘抄かな

○ 綱徳女

忘れぬし物芽出にけり葉ごもりに
銀座裏ベントツの下の猫の恋
花万朶ころの内に棲める私語
ちらし鮎仕上げの卵ほそく切る
逢へるかも髪入念に洗ひけり

○ 中村嵐楓子

春昼やずしんずしんと響く腰
初蝶の浮力不如意でありにけり
くちばしのだいだいいろや春の鴨
表札に杵屋ながし遅ぎくら
空に鳴る四月の風の行方かな

○ 鷹崎由未子

風呂敷に母の名前やさくら餅
旅三日朝寝の枕かへしけり
「おめでと〜」に添ふるネクタイ葉ゆる
葉桜や今だから読む幸福論
ジャングルジムに雨やはらかき立夏かな

○ 松本峰春

散る花のひとつら耳へ降りかかる
一晚を使ひ切つたる猫の恋
暮れてよりすさまじき声猫の恋
牡丹桜外濠川へ続く道（姫路城）
八十路過ぎて愚痴多くなる春の宵

○ 木村傘休

やうやくに雨上がりゆく木の芽和
露の雨身の上話切りもなく
収束の目星も付かず四月尽
せめてもの自粛の贅の新茶かな
皆若き維新の志士や夏蜜柑

○ 加藤良子

オバマ氏と同じ折鶴広島忌
日米で同じ折鶴広島忌
放射能お・う・さ・ら・ばとよ原爆忌
飛行機に乗れぬ刀や雲の峰
終戦日刀納むる資料館

○ 鈴木直充

東塔と睦む西塔蝶生まる
山吹や池のほとりに埋め瓦
濤音の昂る松のみどりかな
熊ン蜂吾をひとめぐりして縛す
葱咲くや思ひのほか永らへて

○ 近藤牧男

雁帰る常磐線に今も貨車
花の雨社殿の奥の灯かな
どちらかといへば泣き虫すみれ草
太古より空はひとつよ黄砂降る
春落葉掃き残したる暮色かな

○ 吉澤恵美子

海よりの雨くるきざし豆の花
葱坊主朝日が好きで笑ひ出す
紫木蓮真砂女のそこに在る様な
鎌倉の市場休まず花の雨
藤ゆれて母の夕影むらさきに

○ ト部 黎子

山城の栄枯盛衰黄砂降る
ひと漕ぎに惜しむ残生半仙戯
人生の音色日永の駅ピアノ
来し方の悔いは御破算朝ざくら
ペン先の言の葉攫ふ花吹雪

○ 卯木 堯子

三面鏡覗けば春思三倍に
春朝餉「ミチクサ先生」読む食後
古里は札幌アスパラガスも吾も
転た寝は失心に似る老いの春
猫暦の猫にキスする五月かな

○ 深川 敏子

春蘭「防人の歌」さだまさし
夢紡ぐ蓮華の花の首飾り
メーデーも昭和も遠くなりけり
聖五月小さき喜び見つけやう
日本の何処かで地震鯉幟

○ 大室恵美子

緑立つ格式高き表門（宿天寺五句）
甘茶仏真似して園児天を指す
歳月に褪せぬ師の句碑風光る
「おかげさま」の思ひ深まる仏生会
鐘の音に藤房のゆれ揃ひけり

○ 尾野奈津子

晩学のスマホ教室芽吹き初む
囀や五百羅漢の大き耳
おぼる夜や猫の横切る花見小路
花衣会うて別れて後の悔い
旅人にやらずの雨や暮の春

○ 小嶋 恵美

うつとりと雲くぐりくる春の鯉
耳遠きふたりとなりぬ花の雲
桃咲いて大地ふくらむ夜の雨
すずめらに桜葉降る校舎裏
巢燕の残る一羽に親戻る

○ 三宅 文子

糸遊や万葉集の恋の歌
葱坊主風と遊んでゐるばかり
踝を撫でて春風通り過ぐ
二人居て二つ買ひをりさくらもち
塔二つ八十八夜の影あはき

○ 太田 慶子

相槌を打ちたるよりの春愁ぞ
花冷えや投函をつとためらへる
鈴ならしパン売りの来る花のころ
桃の花好物あとに取り置きて
勤行の音吐朗朗若葉吹く

○ 青柳 雅子

木々の芽のほぐれて山は丸くなる
老鶯に呼び止めらるや切通し
観音の御足何文春うらら
つちふるや古墳にきざむ星宿
てにをはに迷うて灯す春の燭

○ 木多 芙美子

吹くほどに淋しくなりぬしやぼん玉
右倣へ拒みてゐたる葱坊主
清明の棚田や水の香の走り
母の郷はわが古里や柿若葉
かごめかごめ汝も淋しや修司の忌

小張 志げ

輝けり満願の日の松の蕊
多羅葉に上出来なると新茶くる
蘊蓄の深き言の葉古茶の壺
さみだれやあの約束をうやむやに
蚊帳吊草我に男の子の授からず

余言 安立公彦

なつかしき句碑の師の文字風光る （鑑天寺） 佐藤 信子

安住敦先生の逝去は、昭和六十三年七月六日。八十一歳だった。墓碑は目黒区祐天寺に在る。平成六年、墓碑と本堂を隔てた右手に先生の句碑が建立された。へてんとむし一兵われの死なざりし 敦。『古曆』の冒頭第二句目に載り、先生の歴史を代表する句である。最近に私が詣でたのは、二年前の六月だった。去り難い祐天寺である。

作者は今、敦師の墓参を済ませ、句碑の前に佇つ。あの懐かしさを覚える独特の文字は、一句の思いと共に、まさに、「なつかしき句碑の師の文字」である。さらに、「風光る」がその思いをみごとに写している。

太古より空はひとつよ黄砂降る 近藤 牧男

「黄砂降る」、大正期の頃から詠まれ始めた季語と、歳時記は記す。「霾」（つちふる）とも言う。中国北部で吹き上げられた砂塵が空を覆い、空を曇らす。それがわが国に飛来する天象。黄塵万丈とも言う。

す作者。何気なく庭を見ると、二匹の蝶がもつれている。それは心急く作者の思いを、ひと時安らげるのだった。「蝶の昼」が善く出来ている。

わだつみの声聞こえぬか昭和の日 本田 保

「昭和の日」は四月二十九日。昭和天皇の誕生日に当たる。平成十九年に、従来の「みどりの日」を改称し、昭和の時代を顧みる日である。

この句の要点は、「わだつみの声」。わだつみは海神。「海神の声」と「昭和の日」の取合せは、私たちに、第二次世界大戦を思い出させる。日・独・伊・米・英・仏・ソの七か国による世界戦争だった。七年に及ぶ大戦だ。「昭和の日」には、大戦の反復を絶無とする信条が厳として在る。

うかうかと葉桜となる暮しかな 松山三千江

今年の桜は早かった。家近くの小公園の桜は、三月二十四日満開と日記に記している。その桜も時折吹く東風に散り敷くばかり。それがまた「桜」であると言えよう。

この句を見ていると、今年の桜を思い出す。早や二か月が過ぎ、桜は全て葉桜となり、枝を八方に拡げている。全く、「うかうかと葉桜となる」である。そういう日常の中の暮しの日々、それは決して作者のみでなく、世の大方

この句は、「太古より空はひとつよ」と、黄塵を見上げながら、霧の現象を淡々と表わしているのが善い。如何ともしがたい現象なら、それに準ずる対応を為すべきだと、歴史的意識を呈してあるのが感じられる句である。

花篝深窓よりのピアノの音 田嶋 洋子

「花篝」は夜桜を見るための篝火。満開の桜の下道。花篝の照らす桜花は、折からのコロナ禍とは別世界だ。そういう思いでそぞろ歩きの作者の耳に、折しもピアノの音が聞こえて来た。近くにある奥深い構えの家からだった。

この句を見て私は、「深窓の令嬢」という言葉を思い出していた。作家の名は忘れたが、戦後の青少年の胸を打つ小説だった。更にこのことは私にとって、記憶というものを見直す一つのヒントとも成った。

日めくりの昨日のままや蝶の昼 小倉 陶女

「日めくり」、毎日一枚づつ剥ぎ取る曆。以前はこういう曆を良く見た。昔、台所の柱に掛けられている曆を、毎朝はがすのが、見なれた曆の記憶だった。

今、作者は日常が忙しく、昼間ふと柱を見ると、昨日のままの曆が掛けられているのに気付くのだった。急ぎ剥が

の人々の暮しなのだ。この句はそれを善く諾っている。

振り向いて妻に手を貸す春野かな 大文字孝一

「振り向いて」が善い、「妻に手を貸す」が善い。こういう句を見ていると、気が安らいでくる。

思い立って春野の桜を見に行こうと出掛ける二人。野には段差もあれば、水溜りもある。歩いていて、そういう箇所には差し掛かった二人、思わず妻に手を貸す作者の姿が、一つの景として浮かんで来る。何気無い些事だが些事にこそ真理は宿る。思わず春野の風景が視野に拡がる。改めて冒頭の、「振り向いて」の善さを思う。

駆け足の少年の声風光る 溝越 教子

「駆け足」の言葉に目が止まった。そう言えば駆け足をしなくなつて何十年経つだろうか。駆け足は少年のものだ。「駆け足の少年の声」が善い。何十年来忘れていた「駆け足」が、ふと甦つて来る思いがした。更に下五の「風光る」も爽やかだ。上五中七を善く支えている。

作者は周知の通り、春燈誌の表紙絵の作家である。毎月表紙絵に心打たれる人は多からう。五月号の桜は殊に善い。枝も葉も苔も花も、形も善い。感動を呼ぶ絵である。

当月集

安立 公彦選



○ 宮崎 紗 伎

木綿干す日向の匂ひ藤の花
久闊の声のはじくるみどりの日
きざはしは男の歩幅青嵐
葉ざくらや昏れゆく町に水匂ふ
産土の地の甘き香や若楓

○ 秋山 葛

○ 西谷 恵 美 子
春光や水面に映る鳥の影
長閑しや羽繕ひせる残り鴨
帰る鳥をじつと見つむる風見鶏
春夕べ味噌煮にするや独り膳
庭に佇ち行く春独り惜しみけり

○ 農野 憲 一 郎

初蝶の門付けしたる律儀さよ
蛇の衣松が肌をかき抱き
礼拝堂へ装ひ軽き五月かな
晩鐘や麦藁ロール点々と
くちなははや天井裏にゐる羅刹

○ 坂本 依 誌 子

権現堂木の間隠れの重濃し
日差し背に花壇手入れの暮春かな
置縁すこし擦れたる炉を塞ぐ
年少の「ともだちできた」鯉のぼり
大学の窓まだ灯る夜の新樹

春燈の句

安立 公彦選



白蓮を透けて見えぬ空の色
丹精の金の成る木や下萌ゆる
啓蟄やせはしく動く耕運機
入学式校長たりし父偲ぶ
屋根を行く猫ゆつたりと春の昼
報道のへり飛び廻る春の宵
着地して目眩ましする雲雀かな
立ち話桜蔭降る児童館

東京 遠藤 レイ

東京 松本ゆきえ

神奈川 久津摩英子

囀や窓開け放し深呼吸
花冷えや別れの時は突然に
桜蔭降る傘寿の吾を包むがに
懐しき園児の文やさくらんぼ
逝く春や迷路に似たる新開地
惜春や暁鳩のくぐみ鳴き

愛知 後藤 大

ものの芽を数へ一日の暮れにける
記念樹に清明の雨静かなる
花筏水面見せずには舞めける
主のなき庭に芽吹く木たくまじき
空家さへ若葉ひしめき風さそふ
紫蘭咲くや粋な女の裾模様
冬すでに過ぎゆき心ほぐれゆく
水温む友ありて今日生くるなり
咲き映ゆるつつじ変はらず主亡くも
川沿ひにひなげしゆるる杖も吾も
耳元にきて春の蚊のささやける
春苺摘むたびかざす子なりけり
コロナ禍や作れぬものに染卵
夏近しどの木も影をゆらしぬて

大阪 柿原よし子

広島 落久保万里

宮城 澤田 明子